KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

本学特別強化指定クラブ「女子駅伝部」の創部から10年間の成果検証：競技成績と社会貢献活動の観点から

メタデータ	言語: ja 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2024-03-21 キーワード (Ja): 大学部活動, 大学スポーツ, スカウトの強化, 社会貢献活動, ベストシンク賞 キーワード (En): 作成者: 山本, 泰明 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/0002000157

関西外国語大学 研究論集 第119号（2024年３月）
Journal of Inquiry and Research, No.119（March 2024）

本学特別強化指定クラブ「女子駅伝部」の創部から10年間の成果検証

── 競技成績と社会貢献活動の観点から ──

山　本　泰　明

要　旨

2013年に本学特別強化指定クラブとして女子駅伝部が創部され、10年が経過した。競技活動では、二大全国駅伝（杜の都、富士山）に毎年出場できるレベルにはなったが、まだ８位入賞は至っていない。今後さらなるチーム強化のためにスカウトも育成も重要だが、現実的には特にスカウトの強化に一層注力する必要がある。社会貢献活動では、学生たちが自ら企画し、実践する形の様々な活動を試行錯誤してきた。そのひとつの成果として、2022年10月に日本陸連のレッツシンクに応募し、最高賞であるベストシンク賞を受賞した。今後10年を見据えたとき、競技活動と社会貢献活動の両面で留まることなく新しい挑戦を続け、本学チームの独自性を高めていきたい。競技活動と社会貢献活動の両輪について同じ熱量で取り組み、大学部活動としての価値を高め、それらの活動を通じて学生たちが人間的に成長していくチャンスを演出していきたい。

キーワード：大学部活動、大学スポーツ、スカウトの強化、社会貢献活動、ベストシンク賞

１．創部から10年の検証の意義

2013年に本学強化指定クラブとして女子駅伝部が創部され、10年が経過した。２年目に全日本大学女子駅伝（以下、杜の都）、３年目に全日本大学女子選抜駅伝（以下、富士山）に初出場して以降、2019年の杜の都を除き、それぞれ連続出場を続けてきた（表１）。出場するレベルとしてはこの10年で常連になりつつあるが、まだ８位入賞までには至っておらず、必ずしも創部当初の想定どおりに強化が成功してきたとはいい難い。

一方、チームのもうひとつの柱として、社会貢献活動に競技活動と同じだけの価値を置いて取り組むことを目標に掲げ、この10年間で様々な取り組みを行ってきた。この活動に力を入れる理由は、大学部活動の価値は競技結果だけに留まらず、広く社会の中で学生が持つ様々な力が発揮されてこそ価値があり、それらの活動を通じて学生たちが人間的に成長していくことを期待するからである。活動としてはまだまだ未熟で試行錯誤の連続だが、未熟だからこそ苦労して創り上げていく過程で成長できるチャンスも大きい。駅伝大会の順位の数値だけが強化指定クラブとしての大学部活動の価値ではない。

表１．二大駅伝大会での各年度の成績

年度	部員数	全日本大学女子駅伝 ６区間　38.0～38.1km			全日本大学女子選抜駅伝 ７区間　43.4～43.8km		
		順位	タイム	８位とのタイム差	順位	タイム	８位とのタイム差
2013 （１年目）	4		不出場			不出場	
2014 （２年目）	8	21	2時間14分03秒	5分47秒		不出場	
2015 （３年目）	13	13	2時間10分23秒	2分30秒	13	2時間29分42秒	2分30秒
2016 （４年目）	16	13	2時間08分53秒	1分19秒	13	2時間31分30秒	1分14秒
2017 （５年目）	19	17	2時間11分12秒	2分26秒	16	2時間30分05秒	2分17秒
2018 （６年目）	19	13	2時間11分44秒	2分09秒	15	2時間31分03秒	3分01秒
2019 （７年目）	19		不出場		23	2時間34分37秒	6分38秒
2020 （８年目）	20	18	2時間13分18秒	3分19秒	10	2時間30分51秒	1分32秒
2021 （９年目）	22	13	2時間09分57秒	2分39秒	11	2時間29分14秒	59秒
2022 （10年目）	21	12	2時間10分41秒	41秒	14	2時間29分50秒	2分00秒

創部４年目に４学年がそろったときに、一度、報告書を作成した。そして今、創部から10年が経ったタイミングで、改めて成果と課題を整理したいと思う。10年が経ってチーム運営が安定してきたという実感は全くない。学生が毎年入れ替わる中で、10年には10年なりの課題が発生し、常に新たな挑戦をしていかなければ、チームはむしろ停滞、下降してしまうことを日々実感する。今回の報告書が、本チームの未来の更なる発展のために、また同じような立場で活動している団体の方々にいくらか参考になるよう、資料を提示したい。

２．競技活動について

２－１．大学女子の二大駅伝について

本学チームが競技活動としてのチーム最高目標大会と位置づけているのは、全日本大学女子駅伝（杜の都）と、全日本大学女子選抜駅伝（富士山）である。直近2022年度の杜の都、富士山の大会結果を表２、表３に示す。

表２．2022年度　第40回全日本大学女子駅伝の総合成績

順位	チーム名	通算出場回数	総合タイム	順位	チーム名	通算出場回数	総合タイム
1	名城大学	24	2時間03分11秒	14	中央大学	31	2時間11分02秒
2	立命館大学	33	2時間05分42秒	15	佛教大学	21	2時間12分06秒
3	大阪学院大学	29	2時間06分55秒	16	中京学院大学	4	2時間12分16秒
4	大東文化大学	12	2時間07分23秒	17	順天堂大学	29	2時間12分33秒
5	拓植大学	5	2時間07分40秒	18	筑波大学	26	2時間12分46秒
6	日本体育大学	34	2時間08分05秒	19	玉川大学	20	2時間13分14秒
7	城西大学	29	2時間08分31秒	20	亜細亜大学	8	2時間13分52秒
8	関西大学	15	2時間10分00秒	21	東洋大学	9	2時間14分12秒
9	福岡大学	34	2時間10分05秒	22	京都光華女子大学	5	2時間14分49秒
10	大阪芸術大学	10	2時間10分17秒	23	新潟医療福祉大学	11	2時間15分20秒
11	東京農業大学	28	2時間10分27秒	24	環太平洋大学	5	2時間18分36秒
12	**関西外国語大学**	**8**	**2時間10分41秒**	25	札幌国際大学	6	2時間28分23秒
13	東北福祉大学	20	2時間10分45秒				

表３．2022全日本大学女子選抜駅伝の総合成績

順位	チーム名	通算出場回数	総合タイム	順位	チーム名	通算出場回数	総合タイム
1	名城大学	24	2時間21分56秒	13	中央大学	31	2時間29分45秒
2	大阪学院大学	33	2時間25分07秒	14	**関西学国語大学**	**21**	**2時間29分50秒**
3	日本体育大学	29	2時間25分21秒	15	玉川大学	21	2時間30分33秒
4	全日本大学選抜	12	2時間25分39秒	16	亜細亜大学	4	2時間30分38秒
5	立命館大学	5	2時間26分28秒	17	東京農業大学	29	2時間31分04秒
6	大東文化大学	34	2時間27分40秒	18	福岡大学	26	2時間31分54秒
7	城西大学	29	2時間27分47秒	19	京都光華女子大学	20	2時間32分21秒
8	関西大学	15	2時間27分50秒	20	東洋大学	8	2時間32分28秒
9	拓植大学	34	2時間27分50秒	21	佛教大学	9	2時間33分02秒
10	大阪芸術大学	10	2時間28分09秒	22	筑波大学	5	2時間33分05秒
11	東北福祉大学	28	2時間28分32秒	23	中京学院大学	11	2時間34分35秒
12	順天堂大学	8	2時間29分05秒	24	静岡学生選抜	5	2時間39分02秒

両駅伝を見比べたときに見えてくるのは、優勝した大学、入賞した大学、出場した大学について、どれも両大会でほぼ顔ぶれが同じであり、順位変動が非常に少ないということである。例えば両駅伝ともに名城大学が優勝し、入賞圏内も、杜の都では結成されない「全日本大学選抜」チームが富士山で４位に入っていることを考えると、入賞圏内８大学は杜の都と富士山で実質的には全く同じ顔ぶれになる。また、本学が杜の都12位、富士山14位であったように、入賞圏外にある大学も両駅伝ほぼ似たような順位でフィニッシュしている。このようになる理由のひとつは、総距離（杜の都：約38.0km、富士山：約43.5km）と区間数（杜の都：６区間、富士山：７区間）が両駅伝で大差なく、一走者あたりの走距離に換算すると杜の都が約6.3km、富士山が約6.2kmとほぼ同じになり、両大会の内容がとても似通っているからである。一方、男子のいわゆる三大駅伝は、出雲駅伝が６区間45.1km（一走者あたり約7.5km）、全日本大学駅伝が８区間106.8km（一走者あたり約13.4km）、箱根駅伝が10区間217.1km（一走者あたり約21.7km）と内容に明快な違いがあり、その違いゆえにひとつの大学が同年度で三冠を達成することが難しく、入賞チームの顔ぶれも固定化せず、強化と普及（競技人口増）につながっている。女子駅伝も、現状の二大駅伝の成果と課題をいま一度精査し、本当の意味で女子大学生長距離競技者の強化と普及につながる、今の時代にふさわしい駅伝へと作り替えていく時期に来ていると考える。

２－２．本学チームの競技成績の推移

表１に示したように、杜の都、富士山の二大駅伝には2019年の杜の都を除き初出場から連続出場を果たしている。これはひとつの大きな成果であるが、創部当初に10年後を想定していたときには、その次の段階である８位入賞の達成、そして入賞の常連、その中でチャンスが来たときに優勝を狙える位置にいる、というロードマップを描いていたので、そこまでに至らなっていない現実は真摯に受け入れなければならない。

実際に、10年間で８位入賞ラインにどの程度近づいてきたのかについて、８位との順位差、タイム差の観点から10年間の推移を図１、図２に示す。

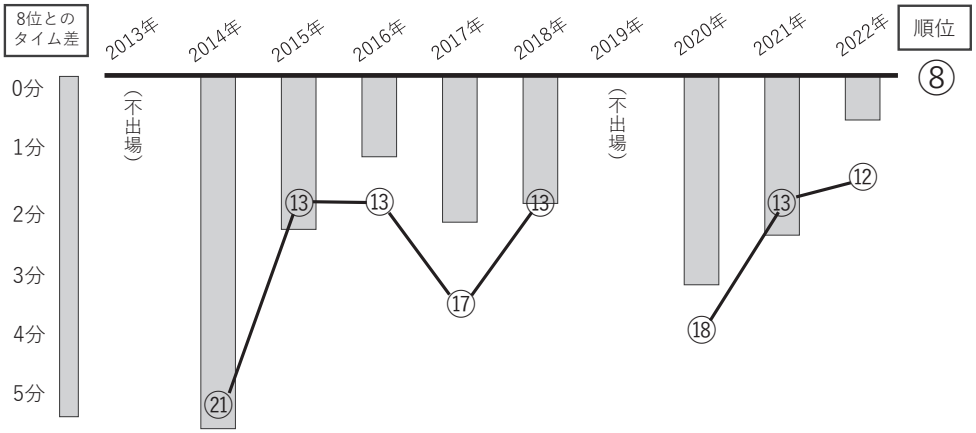

図１．全日本大学女子駅伝での本学順位と８位の大学とのタイム差

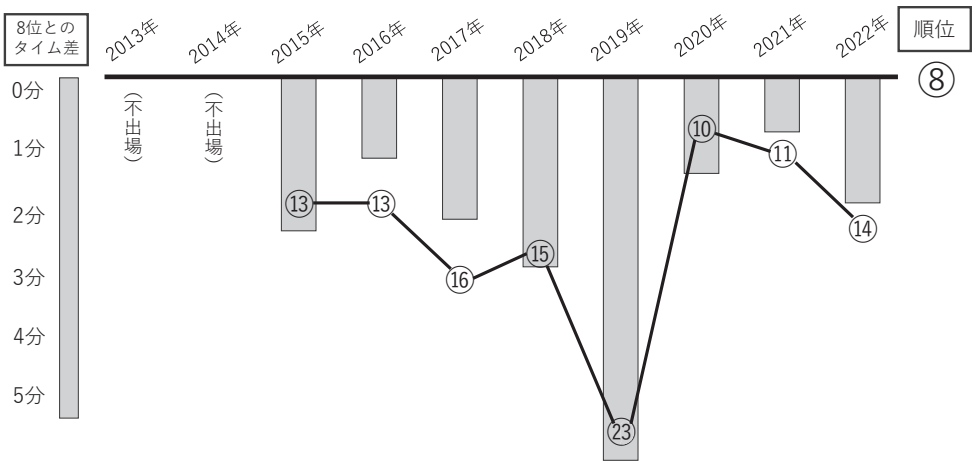

図２．全日本大学女子選抜駅伝での本学順位と８位の大学とのタイム差

杜の都では、10年目（2022年）に過去最高順位を達成し、８位とのタイム差としても41秒で過去最少であった。富士山では、８年目（2020年）の10位が過去最高順位（ただしこの年はコロナ禍の影響で、毎年上位入賞する全日本大学選抜チームが結成されなかった）で、８位とのタイム差は９年目（2021年）の59秒が過去最少であった。41秒や59秒は、大差というほどではなく、８位入賞の目標が全く遠い状況ではない。しかし、昨今の大会は20位くらいまでは下位チームとのタイム差もさほど大きくなく、少しの失敗、力不足で順位を落とすことになる。本

学チームも2019年は、杜の都は関西予選で落ち、富士山はぎりぎり出場できたものの23位という苦しい年もあった。しかし長い目で見れば、そういった逆境があってこそ、学生たちは奮起し、成長の機会にもなる。

成績が上下する中でも、ほぼ毎年予選を勝ち抜き、常に８位を狙える位置をキープできているのは一定の成果と考え、まずは近いうちに８位入賞を達成し、頂上に向けてベクトルを上向きにしていきたい。

２－３．本学チームの競技成績の要因分析

チームの競技成績の要因を、スカウトと育成の２つの側面から分析する。

まずスカウトについては、高校で高い競技実績を持つ選手を多く入部させたほうがチーム戦である駅伝競技で上位に進出しやすいのは自明のことであり、当然どの大学もスカウト活動に力を入れている。図３は、本学チームにスポーツ推薦で入部した選手の高校時の実績を示したものである。

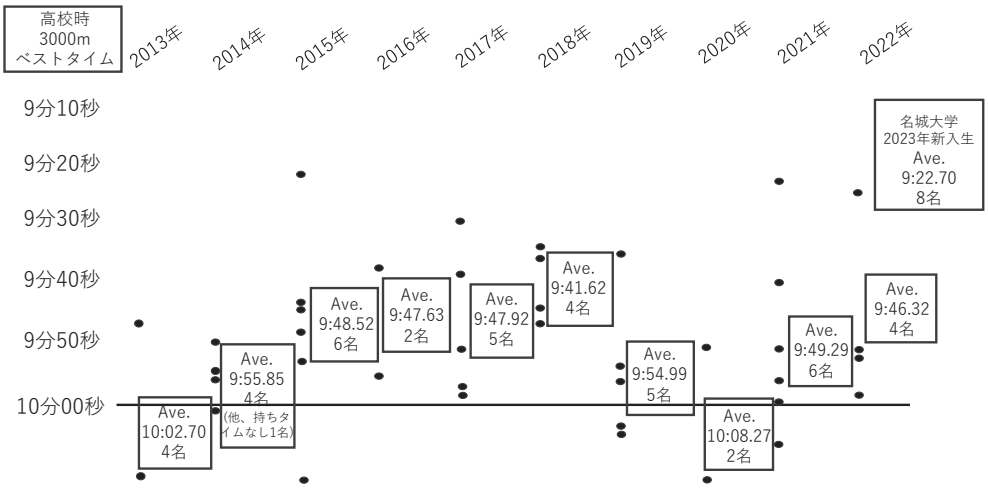

図３．スポーツ推薦による入部者の入学時3000mベストタイムの分布と平均

参考として、直近の杜の都で６連覇、富士山で５連覇している名城大学の2023年度入部者の高校時の実績をあわせて示す。平均タイム、人数とも、本学に比べて圧倒的に強力なスカウトであることがわかる。男子に比べて圧倒的に少ない高校生女子長距離競技者を各大学で取り合っているのが大学女子駅伝界のスカウトの現状で、結果として少ないトップ層が特定の上位校に集中し、上位校がさらに強化されて順位の序列がなかなか変わらない傾向がある。上位校も当然スカウトを重視していて、その牙城を崩すのは容易ではないが、本学チームとしては今

まで以上に、有望な高校生に粘り強く声をかけて説得するという地道な勧誘活動に力を入れていく必要がある。またこれまで、SNS を使って日常の活動の様子を発信して入部に結びつけてきたので、今後もその活動には一層力を入れていきたい。そしてさらに広い視点でみれば、大学女子駅伝全体の魅力を今以上に高めて、大学で駅伝競技に取り組みたいという高校生以下の女子長距離競技者がもっと増えていくように、全大学で協力して大学女子駅伝界全体を盛り上げていく必要があるだろう。

次に、育成の観点から分析する。これも当然だが、入部した選手の走力をどれだけ伸ばせるか、大学生競技者としてのトップ層の選手を多く育てられるかということが、駅伝競技のチーム成績に直結する。図３に示したように、本学チームにスポーツ推薦で入部する選手の高校時の持ちタイム平均は9分51秒04である。2023年度の名城大学の平均タイム9分22秒70と比較すると、差はかなり大きい。

一方、大学での競技力の伸び具合をみると、必ずしも高校時の持ちタイムの良かった選手が大学でも良いタイムを達成するとは限らない。例えば、本学5000m 歴代１位 A 選手（15分58秒09）、２位 B 選手（16分07秒79）、４位 D 選手（16分13秒41）の選手は、高校時の3000m の持ちタイムはそれぞれ A 選手（9分48秒47）、２位 B 選手（10分03秒74）、４位 D 選手（10分10秒71）と、スポーツ推薦での入部者平均と比べても決してよいわけではない。６位 F 選手（16分20秒27）の選手に至っては、高校時は800m の選手であり、とりわけ中距離トップ層というわけでもなく、3000m のレース経験自体もなかった。

そして歴代３位 C 選手（16分13秒20）、５位 E 選手（16分17秒38）は、それぞれ高校時3000m の実績でいうと、C 選手が２位（9分22秒80）、E 選手が１位（9分21秒19）であり、本学チームに入部後も中心選手として活躍した（C 選手は2023年度も在学中）。ただし高校時に既に出していた5000m の自己記録を C 選手（16分05秒63）、E 選手（16分13秒23）とも大学で上回ることができなかったので、育成が順調だったとはいえない。

高校時の実績がある選手もない選手も、全員の競技力を伸ばしたいと思って日々コーチングをしているが、体の成長期がほぼ終わっている女子大学生競技者が大学でも順調に記録を伸ばしていくことの難しさをいつも実感している。体の機能面向上、メンタルヘルスの自己管理、うまく走れるためのフォーム改善、そういった心技体の充実によって、自立した競技者を育成することの重要性を実感する。ある選手でうまくいったことが、他の選手でうまくいくとは限らない。育成には時間がかかるので、日々必ず起きている目に見えないレベルの変化がいつか必ず成果として表れる、という長期的な視点が欠かせない。また、大学卒業後も本格的に競技を続けるのであれば、さらに長期的な視点が不可欠になる。しかし一方で大学で競技を終える者は、大学４年間という限られた月日しかないことを意識させて育成する視点も欠かせない。

スカウトと育成、その両方が大事なのは言うまでもない。理想としては育成を重視した強化

でチーム成績を上げていきたいが、現実にはスカウト力こそが駅伝でのチーム成績を大きく左右することをこの10年間で痛感してきた。今まで以上にスカウトに力を入れ、そのうえで育成に一層の工夫を入れ、チーム成績を上げていきたい。

３．社会貢献活動について

本学チームは、競技活動と同じだけの価値を置いて、社会貢献活動に力を入れることを掲げて活動している。社会貢献活動に力を入れる理由は、若い学生たちが持つ様々な能力、多大なエネルギーは、競技活動だけに留まらず社会の様々な場面で発揮されてこそ価値があり、それらの活動を通じて学生たちが人間的に成長していくことを期待するからである。

表４に、本学チームがこの2022年に依頼を受けて行った各種社会貢献活動の内容を示す。10年間の中で少しずつ増やしてきた活動であり、現在では毎年定期的に依頼があり、ある程度定着してきた感はある。

表４．周辺地域で行っている社会貢献活動

時期と頻度	内容
１月に１回	ひらかたハーフマラソンのサポート
１月に２回	久御山町ジョギング教室の講師担当
５月に１回、９月に１回	枚方市陸上競技大会の審判
７月に５回、９月に５回	枚方市小学生かけっこ教室のサポート
９月に５回	枚方市ナイトラン教室のサポート
11月に１回	淀川河川公園ふれあいマラソンの補助員
11月に１回	枚方市小学生スポーツカーニバルのサポート
年間を通して10回程度	枚方市マラソンクリニック教室のサポート

ただしこれらの活動は、あくまでも外部からの依頼に対して応えた活動であり、これらの実際の現場ではどうしても指示に基づいて受け身的に動くことになりやすい。これらの活動は、社会貢献活動の導入としては貴重な機会だが、本学チームとして本質的に目指している社会貢献活動ではない。

本学チームとして力を入れていきたい社会貢献活動は、自分たちで一から企画して、運営していく性質のものである。受けた依頼で仕事の内容が決まっているのとは違い、自分たちで何から何まで考えて動かなければならずその分苦労も格段に多いが、自分たちが本当にやりたいことを実現でき、いくらでも工夫できる余地がある。そしてその活動の中こそ、本当の学びがあり、達成感がある。

それに関連した活動として、これまで様々な活動を試行錯誤してきた。学内向けのイベントとして「リレーマラソン」大会を開催したり、大学周辺の公園で地域住民の方と一緒に走る機会を設定したり、毎週木曜の夕方の時間に普段は自分たちが練習で使っている大学の陸上競技場を学生や教職員に自由に走ったり歩いたりしてもらうように呼びかけたり、いくつかの企画を行ってきた。なかなか思ったように人が集まらなかったり、進行がスムーズにいかなかったりするが、そうやってうまくいかないときこそ絶好の学びの機会であり、トライ＆エラーを繰り返し、絶えず新しい取り組みを模索してきた。

10年の試行錯誤の中でひとつの結晶となったものが、2022年10月に日本陸上競技連盟の「レッツシンク」に応募して、最高賞であるベストシンク賞を受賞したことである。「レッツシンク」は、陸上を通して社会問題、社会課題の解決に貢献していこう、それを陸上界全体で盛り上げていこう、と日本陸連が呼びかけたものである。本学チームは、大学でも陸上競技を続ける女子競技者が少ないことに着目し、アンケート調査でその要因を探ったり、実際に女子高校生競技者と対面やオンラインで交流会を持って、大学で競技を続けることの楽しさ、面白さを伝える活動を行った。アンケート調査も交流会も内容的には未熟なものだったが、企画して実施して報告した成果として最高賞のベストシンク賞をいただけたことは、学生たちにとって大きな自信になったであろう。

これまで自分たちの活動の幅を広げ、その取り組み内容を積極的に発信してきたことで、賛同者、応援者が徐々に増えてきた。2023年10月現在、中学校部活動の地域移行の課題に関連して、枚方市教育委員会と本学チームが協同して、枚方市の中学生が陸上競技に初めて取り組むチャンスを提供することを目的とした部活動の場を設定することで話を進めている。これまでは各中学校の部活動が担ってきた役割だが、これから中学校部活動の地域移行化を進める中で、ややもすれば子どもたちのスポーツ体験の場が失われかねない。本学チームだけで活動を充実させることには限界があるが、賛同してくれる様々な方々と協力しながら、学生たちがワクワクするような活動に誘導し、学生たちのモチベーション、楽しみ、達成感、自信が増えていくようにサポートしていきたい。

社会貢献活動には、二大駅伝のような華やかなメディア報道、注目度はない。しかし競技活動だけでなく社会貢献活動を充実させてこそ、大学部活動としての価値が高まり、様々な人たちとの関わりの中で学生たちの人間的な成長のチャンスが広がる。本学チームとしては、今後も競技活動と同じだけの価値を置いて、社会貢献活動に取り組んでいきたい。

４．留学希望への後押し

本学は外国語大学であり、大学全体で留学を希望する学生は多い。独立行政法人日本学生支

援機構 JASSO「協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果（2021年度版）」によると、コロナ禍の影響はあるが、協定等に基づく日本人学生派遣数は本学が３番目に多い。

これまで歴代49名の部員の中で、25名が留学を経験した。コロナ禍で2020年度の留学は全面的に中止、2021年度は縮小されたことを考慮すると、さらに人数は多かった可能性もある。これだけの割合の部員が留学を経験しているのは、大学女子駅伝チームでは他に聞かない。留学先では、当然学業生活が最優先であり、競技活動という意味ではどうしてもブランクが発生する。しかし、競技生活から一定期間距離を置くことはマイナス面だけではなく、競技活動を俯瞰して考えるというプラス面もあり、改めてフレッシュな気持ちで競技にも向き合うチャンスになる。留学した者には、チームメイト向けに留学報告会を実施し、留学での学びを言葉にしてチームに還元するよう求めている。

本学ではこれまで、スポーツ推薦による入学者は留学できない、というのが原則だった。女子駅伝部員は、例外として許可をもらって留学を実現していた。しかし2024年度からは原則ルールが変わり、スポーツ推薦で入学した学生も留学できるようになる。本学の特性にふさわしい変更である。留学できるチャンスがあるということを本学チームの特色のひとつとして、積極的に発信していきたい。

５．今後10年を見据えて

創部から10年の成果と課題を振り返ってきた。大学部活動としての価値を高め、そこで活動する学生たちの人間的な成長の場を広げるため、競技活動と社会貢献活動の両方において一定の成果を残してきたことと、改善の余地が多分にあることを確認した。

創部11年目からの次の10年を見据えたとき、まず競技活動では一層スカウトに力を入れ、縁あって本学チームに入部した選手について責任を持って育成し、二大駅伝での入賞、そしてその先の優勝を目指していきたい。また社会貢献活動では、昨今の全国的な課題である中学校部活動の地域移行を問題意識として、枚方市教育委員会をはじめとした多くの方々と協同して学生たちが人間的に成長できる場を演出していきたい。どちらも少し油断をしていると、たちまち後退、あるいはマンネリ化してしまうので、絶えず新しい目標設定、挑戦をしていけるように促していきたい。

駅伝は、基本的には個人スポーツである陸上競技の長距離競技を、一本のたすきをリレーしてチームで順位を競い合うという集団スポーツにアレンジしたものである。その主たる目的は、強化と普及である。世界的にメジャーなスポーツとはいえないが、一人の走者が担当区間を担い、責任を持って次の走者へとタスキをつないでいくという競技性が日本人の気質に合うのか、「駅伝大会」自体の人気がとても高い。その人気があって10年前に創部された本学チームが、

今後10年間とその先を見据えた中で大学部活動として一層の価値があるものになるよう、本学チームの独自性を高め、競技活動と社会貢献活動の両輪をより大きく回していきたい。

文献

独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）「2021（令和３）年度日本人学生留学状況調査結果」studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2023/02/date2021n.pdf

武田一「本学駅伝プロジェクトについての研究（第６報）」『桜美林大学研究紀要　総合人間科学研究』３号、2023年、249-259頁。

日本陸上競技連盟ホームページ
「【JAAF×SDGs】みんなで考え取り組んだ、陸上界の「SDGs」！ BEST THINK賞・GOOD THINK賞を発表！」http://www.jaaf.or.jp/news/article/17218/

山本泰明「本学特別強化指定クラブ「女子駅伝部」の創部から４年間の成果検証 ― チーム成績、学業生活との両立、学内外への貢献の観点から ―」『研究論集』107号、2018年、235-244頁

（やまもと・やすあき　英語キャリア学部准教授）